

Resonances of DiStances/共鳴する距離感

「Resonances of DiStances/共鳴する距離感」は、デュッセルドルフとその周辺地域で過去現在活動している日本の現代美術家たちが、異文化への越境を通して切り開いた多様なフロンティアを紹介する展覧会プロジェクトです。

デュッセルドルフは、第二次世界大戦後の経済発展を背景に、多くの日本企業を受け入れ、西欧最大級の日本人コミュニティを築くとともに、現代美術においても重要な役割を果たしてきました。1960年代から80年代にかけて、ゼロ、フルクサス、ミニマル・コンセプチュアルアート、新表現主義など、当時先端の現代美術が同地で花開き、世界中からアーティストを引き寄せました。1970年代以降は、日本からも多くの若き現代美術家が同地域へ移住してきました。

本プロジェクト「Resonances of DiStances/共鳴する距離感」では、こうした日本の現代美術家の文化的越境に注目し、生活、家族、歴史、文化、経済、政治、自然環境などが複雑に絡み合う社会と自己との関係の中から、独自の表現を作り出してきた世代の異なる美術家たち——白川昌生、久保田成子、宇多村英恵、栗林隆&志津野雷、斉藤陽子、広瀬奈々&永谷一馬——を、個展あるいは二人展形式で取り上げます。

19世紀後半の急速な近代化以降、日本の美術は、他者、主に西洋との出会いと摩擦の応酬の中で自我を形成してきました。本プロジェクトでは、西洋社会に飛び込み、常に西洋美術という他者を意識せざるをえない環境に身を置いた日本の美術家たちの作品を通して、意識的あるいは無意識的に織り込まれたメインストリームとしての西洋美術の存在、西洋美術を介することで改めて浮き彫りになった日本の存在、そして合わせ鏡のように連鎖し、変化し続ける一枚岩ではない両者の関係性を考察します。「自己と他者」「中央と周縁」「伝統と再解釈」「自然と文明」「記憶と神話」というキーワードを手



ポスターをご希望あるいは配布にご協力いただける場合はご一報下さい。

掛かりに、異文化との邂逅の中で変容を続ける日本の現代美術家たちによる多様な表現が、デュッセルドルフとその周辺地域で響き合います。

展覧会や市内でのアクションと並行して、オンラインでのコンテンツも多数用意しております。映像プログラム、展覧会の記録、そしてアーティストとのインタビューなど、新型コロナウイルス感染症でご来場いただけない方もアクセス可能な環境を整えてまいります。

「Resonances of DiStances/共鳴する距離感」

プロジェクト実施期間：2021年4月23日から2021年1月16日

展覧会・イベント開催期間：

1. 白川昌生展（2021年4月23日から6月5日）
2. 久保田成子、宇多村英恵二人展（2021年6月18日から7月30日）
3. 映像祭（2021年夏を予定）
4. 栗林隆&志津野雷二人展（2021年9月3日から10月16日）
5. 斉藤陽子展（2021年10月28日から12月10日）
6. 広瀬奈々&永谷一馬展（2021年12月2日から2022年1月16日）

*6) はレバークーゼンのクンストフェアアインにて実施

会 場：basedonart（1～5）、Kunstverein Leverkusen（6）、デュッセルドルフの市内各所（1～5）、レバークーゼンの市内各所（1、6）

参加アーティスト：白川昌生、久保田成子、宇多村英恵、栗林隆&志津野雷、斉藤陽子、広瀬奈々&永谷一馬、竹田信平、木村悟之 他

キュレーター：三上真理子、ダウンヤ・エバース

プロジェクトマネジャー：トーマス・マス

協 力：Kunstverein Leverkusen、Imai 財団、久保田成子ビデオアート財団

助 成：Kunstfonds 財団- Neustart Kultur、Chempark Leverkusen

お問い合わせ：basedonart gallery mail@boa-basedonart.com